

学校・進路・学歴の日韓比較

—中学生・高校生調査をもとに(2)—

○藤田武志(上越教育大学) ○熊谷信司(東京大学大学院) ○金美蘭(全北大学非常勤)
中村高康(群馬大学) 有田伸(東京大学大学院) 渡辺達雄(名古屋大学大学院)

1. はじめに

学歴・選抜・進路といった問題は、日本の教育社会学にとって中心的なテーマの一つである。しかし、その一方で学歴・選抜研究におけるブレイクスルーの必要性が指摘されるようになってすでに久しい。社会問題として扱われる機会もかつてほどではなくなったこと、そして学会自体の拡大に伴って扱われるテーマも多様になったこともあって、この領域はやや「古い」テーマと見なされることさえある。「若い世代の研究者はこのテーマを避けて通る」という傾向さえ指摘されることもある(高橋1996)。

しかしながら、もし学歴や選抜の研究がすでに先行世代にやりつくされてしまった領域だという認識があるとするれば、それはまったく誤りであるといわなければならない。単純な話であるが、従来の研究は大筋では「欧米」との対比においてこれらの問題をとらえてきたのであり、単純化を恐れずに言えば、「非欧米」は手つかずの状態といってもいいすぎではないからである。菊池(1992)も述べているように、新たなブレイクスルーの萌芽が比較研究と歴史研究にあるとするならば、すでに近年厚みを増している歴史研究と並んで、従来ほとんど取り組まれていない「非欧米」との比較研究に大きな可能性があることは明らかであろう。

私たちは、以上のような問題意識から、日本と同様の学歴社会であり、日本以上に激しい受験競争の社会といわれる韓国を比較対象として取り上げる。その理由は、従来言われてきた「日本的特質」を相対化するためには、日本同様に激しい受験競争や学歴社会が指摘される国との比較が不可欠だからである。とりわけ古来中国文化の影響を受け、戦後はアメリカの影響を受けてきたという共通点を有し、しかも相互の文化交流も古くからあった韓国との比較は、単純な文化論的解釈に還元しえない社会構造

・制度などの違いによる差異を検討するのに適している。そこで本研究は、日韓の中学生・高校生への比較調査を実施し、両社会の異同を分析することで、従来欧米との対比で論じられてきた学歴・選抜・進路に関わる研究領域に一石を投じることを目指す。

2. 調査の概要

私たちは、約5年前より日韓の教育を比較研究するための研究会を組織し、文献・資料の検討を進めてきた。本報告は、この「比較教育社会学研究会」において実施された、日本の中学生・高校生、韓国の中学生・高校生を対象とした質問紙調査の分析結果の報告である。調査票は、中学生と高校生それぞれの調査票を作成し、中学・高校のそれぞれについて両国の状況を踏まえて可能な限り同じ内容の質問項目によって構成した。翻訳は原則として研究会内で行い、複数回のネイティブチェックを行って微調整し、都合4種類の調査票を作成した。調査内容は、学校、友人、進学に対する意識や行動、社会観、家庭環境などである。また一部の対象校については直接訪問し、聴き取り調査・資料収集を補足的に行った。調査地域は、大都市と地方それぞれの状況を把握するために、中学・高校ともに、東京および地方都市、ソウルおよび地方都市の4地点とした。調査方法は、学校通しによる集合自記式調査である。ただし、無作為抽出ではない点には一定の留保が必要である。

・中学生調査について

卒業直前の中学3年生を対象として、韓国版をソウル市と江原道A市において2000年2月に実施、日本版を、東京都23区と群馬県内のB市において2000年3月に実施した。サンプル数は韓国が1056名であり、内訳は、ソウル市が7つの中学校の518名(男211、女307)、江原道A市が5つの中学校の538名(男323、女215)である。日本は1097名、内訳は東京都23区が6つの中学校の554名(男297、女257)、群馬県B市が7つの中学校の543名(男287、女256)である。

・高校生調査について

進級したばかりの高校3年生を対象として、韓国版をソウル市と江原道A市において2000年3～5月に実施、日本版を、東京都23区と鳥取県内のC市において2000年4～6月に実施した。サンプル数は韓国が1354名であり、内訳は、ソウル市が7つの高校の862名(男592、女270)、江原道A市が5つの高校の492名(男243、女249)である。日本は1439名、内訳は東京都23区が7つの高校の1063名(男535、女528)、鳥取県C市が5つの高校の376名(男198、女178)である。

3. 韓国の教育制度

韓国の学制は6-3-3-4制となっており、日本と同じく単線的な教育制度が敷かれている。初等教育機関である初級学校と前期中等教育機関である中学校への就学率はほぼ100%であり、近年では中学卒業者の高校進学率も99%を超えている。

高等学校は、日本の普通科高校に相当する一般系高校、職業教育を行う実業系高校とに大きく分けられる。大都市部においては一般系高校の「平準化措置」がとられており、選抜を通過した一般系高校進学希望者は、抽選によって学区内の高校に振り分けられる。この制度は私立高校に対しても等しく適用されるものであるため、平準化地域においては、公立一般系高校と私立一般系高校との間に実質的な相違が認められない。

高等教育機関は、職業教育を主目的とする二-三年制の「専門大学」と四年制大学とからなる（注：その他、「各種学校」などがある）。国公立、私立の別を問わず、四年制大学及び専門大学への進学を希望する者は、原則的に、全国規模で行われる「大学修学能力試験」を受験しなければならない。

高校卒業者の高等教育進学率は近年大きく上昇しており、1999年時点では、現役進学者だけで66.6%という高い水準にある。これを学校種別に見ると、専門大学への進学率が21.3%、四年制大学（「教育大学」を含む）への進学率が44.9%となっている（教育部・韓国教育開発院（1999）『教育統計年報 1999』）。また、大学院への進学者も最近では増加の一途を辿っており、1999年の大学院進学者数は84,273人に達している。これを四年遡った1995年の新規高卒者数で除するとその値は13.0%となり、ごく単純に言えば、高校卒業者の8人に1人が大学院に進学していることになる。

4. 本報告の内容

本報告では、受験体制、生徒文化、ジェンダーの面から日本と韓国の比較分析を行う。

まず藤田が、中学生調査をもとに、受験体制へと子どもたちが取り込まれるメカニズムについて検討する。次に熊谷が、高校生調査をもとに、高校のトラッキング構造と生徒文化に関する日韓比較を行う。最後に金が、高校生調査をもとに、日韓におけるジェンダー分化のありようの違いを分析する。

なお、本研究は、同一コンセプトと同一データに基づく2発表より構成されており、他の分析結果については、「学校・進路・学歴の日韓比較—中学生・高校生の調査をもとに（1）—」

を参照していただきたい。

5. 受験体制へのインヴォルヴメント

ここでは中学生調査をもとに、日韓両国における受験体制へのインヴォルヴメントのメカニズムを、生徒たちの行動（勉強時間）と意識の両面から探っていこう。

まず、高校進学過程における生徒たちの行動を、勉強時間という側面から見てみよう。塾などを含まない平日の勉強時間を尋ねたところ、一日あたり平均して日本が119.26分（1.99時間）、韓国が115.81分（1.93時間）であり、T検定の結果、日本と韓国との間に有意な差はない。塾や家庭教師（韓国では課外）を利用していると答えた割合は、日本が78.7%、韓国が45.6%であった。そこで、塾や家庭教師などを利用して勉強している時間を尋ねた設問に対する回答を上記の勉強時間に加えると、日本が週あたり平均して1039.96分（17.3時間）、韓国が957.07（16.0時間）となり、T検定の結果、その差は有意であった。また、「中3になってから、友だちとの遊びや趣味などをやめたり、へらしたりした」という設問を肯定した割合は、日本で45.6%、韓国で27.5%であった。受験体制を「生活が進学に関する勉強を中心に組織されること」とするならば、日韓両国における中学生3年生たちの受験体制へのインヴォルヴメントの度合いは同程度であるか、日本のほうがやや高いとも言えよう。

次に、両国の生徒たちの意識を競争、入試への不安、努力といった側面から見てみよう。第一に、高校進学を同じ学校の友だちとの競争だと感じているかどうかという設問を肯定した割合は、韓国が35.7%、日本が21.1%にすぎなかった。両国とも、高校への進学過程を学校の友だちとの競争だとは感じていない者が多数を占めている。第二に、希望する高校へ行けないかもしれないと不安になったという設問を肯定した割合は、日本が79.2%、韓国が52.7%となっており、カイ二乗検定の結果、その差は有意であった。日本のほうが受験に際して不安を感じる割合が高い。第三に、一流大学に入るために一番重要なものを尋ねた設問に対して「本人の努力」と回答した割合は、両国とも8割程度であった（日本：79.5%、韓国：79.6%）のに対し、「自分は、どんな難しい大学でも努力すれば入学できる」という設問で自らの努力の限界性について尋ねたところ、日本では35.7%に過ぎないが、韓国では70.0%もの生徒が肯定した。日本よりも韓国の中学生たちに、努力信仰が強いと言えよう。

以上のように、日韓両国の中学生たちの行動

からは、両国とも勉強を中心とした受験体制へと取り込まれていることが示される一方、彼らの意識からは、高校進学を「敵対的競争」というイメージで捉えたり、日本における受験体制へのインセンティブを「努力信仰」として捉えたりすることの限界が示唆されるのである。そこで、進学アスピレーションや勉強時間の規定要因について重回帰分析を用いて検討し、日韓の受験体制への誘引メカニズムをさらに考察していこう。

進学アスピレーションは、「学校・進路・学歴の日韓比較—中学生・高校生の調査をもとに(1)—」において、有田が高校生調査をもとに韓国よりも日本のほうが階層の規定力が高いことを見出しているが、中学生調査でも同様であった。それに対し勉強時間の規定要因は、日本の中学生たちの場合、階層要因が有意ではなく、韓国では若干、階層要因が有意に規定している。また、勉強時間の規定要因として、進学アスピレーションが韓国においてのみ有意である一方、入試に対する不安が日本においてのみ有意であった。

韓国では、階層に関わらず進学アスピレーションが高く、それをインセンティブとして「努力信仰」のもとで勉強を中心とした受験体制へと取り込まれていくと言えるのではないか。それに対し、日本では進学アスピレーションが階層によって規定され、韓国に比べ全体的に低くおさえられているにも関わらず、勉強時間は階層に規定されず、韓国と同程度かそれ以上となっている。日本では、進学アスピレーションではなく、むしろ入試に対する高い「不安」をインセンティブとして受験体制へと取り込まれていくと考えられる。

以上に加え、群馬県B市のほうが東京都よりも、江原道A市のほうがソウル市よりもそれぞれ勉強時間が長く、しかも勉強時間を目的変数とした重回帰分析の結果でも地域ダミーの規定力が大きいことが示された。また、高校進学に関わる意識についても同様に地域による偏差が見いだされた。これは、選抜システムが受験競争のありようを規定するという「受験競争の社会的構成」(藤田 1996)を示しているのではないか。

たとえば、ソウル市における平準化措置は、江原道A市では導入されていない。また、東京都における私立高校も含めた選択肢の多様さは、群馬県B市にはない。紙幅の都合で詳述はできないが、分析の結果、こういった各地域における選抜システムの違いが、高校進学をめぐる中学生たちの意識と行動に影響を及ぼし、各地域の偏差を作り出していることが示された。

以上のように、受験体制へのインヴォルヴメントは日韓で異なるメカニズムのもとで生じており、また、各地域における選抜システムのありようが生徒たちのインヴォルヴメントのありようを規定しているのである。

6. 高校トラッキング構造の違いと生徒文化

ここでは、高校生を対象として、学校生活や、ライフコースにおける学校・学歴の位置づけなどをめぐる意識や行動について比較考察を行う。

はじめに、いくつかの質問項目を用いて、日本と韓国の高校生の全体的な傾向を概観しておくことにする。

まず、全体に韓国の高校生のほうが、学業達成に重点を置いていることがわかる。学習時間を例にとると、「学校・進路・学歴の日韓比較—中学生・高校生の調査をもとに(1)—」で渡辺が詳細に分析しているように、両国で大きな差がある。学業に関する意識を見てみると、例えば、「睡眠時間を削ってまでよい成績をとらなくてもよい」との質問に肯定的な回答をした人は、日本では70.4%、韓国では36.1%である($p=0.000$: カイ二乗検定による有意確率、以下同様)。将来展望・ライフコース観に関わる、学歴への意識を見てみると、「どんな学校を出たかによって人生がほとんど決まってしまう」との質問に肯定的な回答をした人は、日本で40.8%、韓国で63.0%であった($p=0.000$)。また、学歴の効用については、「高い収入」「高い地位」といった項目では、日韓ともほぼ9割以上の肯定率だったが、「社会に出たときに役に立つ友人が得られる」(日本36.0%、韓国52.7%、 $p=0.000$)、「周囲の人から高く評価される」(日本78.2%、韓国88.4%、 $p=0.000$)、などの項目では韓国の高校生のほうが高く評価している。その一方、同じ設問で「やりがいのある仕事ができる」(日本54.0%、韓国36.2%、 $p=0.000$)、「教養が豊かになる」(日本65.6%、韓国60.8%、 $p=0.009$)、などの項目では日本の高校生の肯定率のほうが高い。このことから、韓国の高校生は日本の高校生に比べ、特に学歴の手段的な効用を評価していると考えられる。

次に、学業以外の学校生活についての項目を概観する。高校はどのようなところかを尋ねた質問で、日韓で大きな差が見られたのは「自由に生活を楽しむところ」であり、肯定率は日本で54.2%、韓国では25.1%であった($p=0.000$)。また、「遅刻することが多い」(日本32.4%、韓国18.5%、 $p=0.000$)、「学校の授業をさぼったことがある」(日本34.7%、韓国21.4%、 $p=0.000$)、などから、学校へのしぼりが韓国のほう

がやや強いことがうかがえる。さて、学校外での生活を見てみると、電話やテレビドラマ視聴など、メディア接触到に大きな差は見られなかったが、「休日には友達と繁華街で遊ぶ」（日本51.7%、韓国62.6%、 $p=0.000$ ）、「最新のヒット曲が歌える」（日本58.6%、韓国82.6%、 $p=0.000$ ）、「流行に敏感だ」（日本38.8%、韓国51.8%、 $p=0.000$ ）、などでは韓国の高校生の肯定率が高くなっている。

以上は、全体的な傾向である。しかし、従来より、生徒文化研究に関しては、学校ランクなどのトラックが、生徒文化の分化を大きく規定していることが指摘されている。このため、日本でも韓国でも生徒文化は一様ではなく、分化しているであろう。

そこで高校の位置づけを見てみると、韓国の学校システムは、「3. 韓国の教育制度」で触れたように、単線型の6-3-3-4制を採っているという点で日本と共通である。しかし、同時に触れたように、高校入試のしくみは日本と大きく異なり、大都市部（本調査ではソウル市）の一般系高校では、平準化措置が採られており、構造的に違いが見られる。結果として、ソウルの高校では、まず一般系/実業系という系列によるトラックが生まれ、しかし同一系列内では顕在的な形で学校間格差という発想は生まれにくい。

高校をめぐる両国のこのような構造的な違いは、高校生の意識や行動の分化にも何らかの違いをもたらすものと考えられる。そこで、以下では、このような構造の違いに着目して、いくつかの分析を加えてみたい。なお、ここでは、韓国については平準化の行われているソウル地区のみを対象とする。

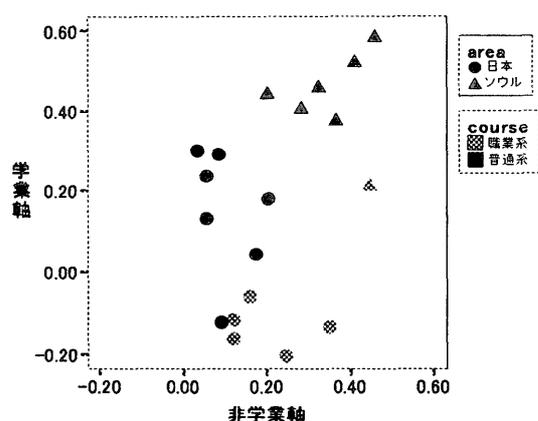


図1: 日本・韓国(ソウル) 学校別生徒文化タイプ

初めに予想されるのは、日本は学業達成や学校生活への意味づけに対して学校差が相対的に大きく、ソウル地区では平準化のために各学校の平均値は似たようなものになり、学校差による分化は相対的に小さいと考えられる。代わり

に、ソウルでは学校内での分化が進んでいるのではないかと考えられる。

図1は、縦軸に学業・学歴を中心とした質問を、横軸に学業以外の学校生活へのコミットや学校外文化への接触を尋ねたいくつかの質問を用いて、その平均値を学校別にプロットしたものである。各軸の数値は、4点尺度の質問をリコードしたものである（4点尺度のうち、最もプラス方向の回答を+1.5、次を+0.5、やや否定的な回答を-0.5、最も否定的な回答を-1.5として計算）。縦軸はプラス方向に行くほど学業達成や学歴獲得に肯定的であることを示し、横軸はプラス方向に行くほど学校生活の学業以外の諸側面や、学校外でのカルチャーの接触に肯定的であることを示す。これを見ると、日本よりはソウルのほうが学業軸に関する差がやや少ないようにも見受けられるが、学校差がないわけではない。これには地域性（親の階層性）などを考慮していく必要がある。一方、非学業軸はソウルも多様であるが、ここでは日本はすべて共学校であるのに対し、ソウルでは男子校・女子校・共学校それぞれがあることに起因するところが少なくなく、注意が必要である。

そこで、次にソウル地区について、学校内での分化を見るために成績トラックを用いて考察を進めると、学業への構えや学歴効用などについては、おおむね日本の学校トラックと同様な傾向を示していると言える。しかし、勉強へのストレスへの肯定度は成績に関係なく、また親からの期待の度合いも、成績を問わず、非常に高い。一方、日本では学校トラックによってこれらには違いが見られる。これらから、単純に日本の学校間トラックとソウルの学校内トラックを同一視していいものではないだろう。

以上をふまえ、当日発表では、日本のように高校入学時から比較的是っきりと学業達成の方向性がある程度規定されている構造を持つものと、ソウル地区（の一般系高校）のように基本的には不可避免的に学業へのコミットを強く余儀なくされる構造の中で起こってくる生徒文化の分化の内実を、データを提示しながらさらに追求していくことにする。

7. ジェンダー分化の日韓比較

日韓両国では高校段階での女子の進学率が男子のそれと変わらないにもかかわらず、日本では高等教育進学に依然として性による不平等が存在している。このような女子の教育機会の獲得には「男=仕事、女=家庭」という「性役割規範」が存在していることが指摘されてきた。しかし、フェミニズム運動やそのパースペクティブが明らかにしてきたように、ジェンダーに

よる分化やそのあり様は社会的・文化的に多様であり、可変的である(コンネル 森他訳 1993)。ここでは、このような視点に立って高校生調査をもとに進学アスピレーションによるジェンダーの分化について日本と韓国を比較分析する。

まず、進学アスピレーションの違いについてみよう。女子の進学希望をみると、韓国の方では75.3%の者が四年制大学、さらには大学院までの教育を希望しているのに対して、日本の方では四年制大学、大学院までの進学を希望している者は53%にすぎなく、27.6%の者が短期大学や専門大学までの進学を希望している。これを男女別にみると、韓国では性別による進学アスピレーションの違いがまったくみられないのに対して、日本では「男子は大学、女子は短大」という有意な違いが見られる。女子の高等教育進学のパターンが韓国では四年制の大学中心であり、日本では二年制の短大が中心であることの反映と考えられる。

「女=家庭」という性役割分業意識の指標として希望職業を取り上げ、進学アスピレーションとの関連をみると、大学・大学院までの進学を希望している者のなかでは、高い学歴を必要とされる専門・管理職に就きたいと思ってる者の割合が日本と韓国それぞれ72.9%、97.8%であり、進学アスピレーションが低い者ほど一般事務職を希望している(日本:カイ二乗72.177、sig: .001、DF: 16、韓国:カイ二乗78.070、sig: .001、DF: 16)。女子の進学アスピレーションが将来展望の分化と結びついている形でそれぞれ社会の教育制度や構造を作り出していることがうかがえるのである。

次にこれらの社会全般の性役割規範との関係を階層変数を使って比較検討した。女子の進学アスピレーションを規定する影響力をみるため、進学アスピレーションを従属変数として重回帰分析を行った。韓国と日本ともに共通して父親の職業階層と学歴階層の影響が現われるが、日本においてのみ母親の学歴が女子の進学アスピレーションの規定要因として有意である。韓国の方では母親の学歴の効果はみられない代わりに、成績が規定要因として有意な値を示している。

このことから、メリトクラティックな意識とジェンダー意識を階層との関連で検討してみた。まず、(女子は)「就職する祭にどの学校を出たかが重要である」という女子の学歴・学校歴効用を従属変数に、(女子は)「仕事より家庭を優先したほうがよい」「いい学校を目指さなくてよい」「社会で活動する能力は女より男のほうが優れている」というジェンダー意識を独立変数にした重回帰分析の結果をみると、

日本ではすべてのジェンダー意識が女子の学歴・学校歴の効用意識に有意な効果を持つ。「女子は…」と思う者ほど「仕事」のための学歴・学校歴の効用をあまり評価しない。韓国においては「仕事より家庭を優先した方がよい」という項目に関しては有意ではなく、「仕事か、家庭か」という性役割規範意識が業績の指標としての学歴・学校歴の効用意識にあまり影響しないことがうかがえる。

さらに、業績としての学歴・学校歴の評価に強く結びついているジェンダー意識が階層とどのようにかかわっているのかをみると、韓国よりも日本の方が、階層が高いほど性役割規範意識を否定する傾向が強い。「仕事より家庭を優先した方がよい」という項目に関して言うと、それを否定する者の割合(全くそう思わない+あまりそう思わない)は、母親の学歴が大学・大学院卒である場合は82.3%であるのに対して、母親の学歴が高卒の場合は67.7%と有意な差がみられる。

これらのことから、韓国よりも日本において成績という学校の業績による進学アスピレーション、さらにはそれと結びついている学歴・学校歴による女子の職業地位達成というメリトクラシー規範が階層文化と密接にコミットしていると考えられる。すなわち、階層が高いほど、性役割分業観を否定する業績指向の社会化を経て進学アスピレーションが高められ、将来の進路選択を継続就業の可能な専門職に向けられるという、業績主義的(メリトクラシー)社会化のメカニズムが想定できるのである。女子に限って言えば、韓国の方では階層文化と業績主義社会化がそれほど強く結びついていないと言えよう。

以上のことを手がかりに、階層以外の学校変数や社会構造認識などがこれら女子学生の将来展望にどのようにかかわっているかについて詳しい分析を進める予定である。

<参考文献>

- コンネル・ロバート 森重雄他訳、1993 『ジェンダーと権力—セクシュアリティの社会学』三交社。
- 藤田武志 1996、「選抜システムと中学生の競争意識」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第36巻、139-148頁。
- 菊池城司 1992、「学歴・階層・職業」『教育社会学研究』第50集、87-106頁。
- 高橋一郎 1996、「書評 齊藤俊彦著『競争と管理の学校史』」『教育社会学研究』第58集、137-139頁。